詠む広場

毎日俳壇

西村　和子　選

寒月や竹の奥より警策音
沼津市　川井大次郎

△評▽緊張感に満ちた寒行の厳しさが、視覚聴覚のみならず皮膚感覚にも伝わってくる。禅寺の場所も想像できる。

短日の子らの遊びも気忙しく
大阪　池田　壽夫

△評▽日の暮れまでしか外遊びが許されてない子どもたちの、本能的な行動と言えるだろう。

冬凪や小舟で向かふ内祝ひ
東久留米市　夏目あたる

手を握り返す別れや冬の駅
岸和田市　妙中　正

トロ箱に散らかる鱗冬の蠅
下野市　石井　光

コロンボの渾名を貰ふ古コート
神戸市　田中　忠士

一望に丹沢連山冬夕焼
秦野市　安藤　泰彦

曲がりたる指を励ます十二月
米子市　永田富基子

隅々まで腕を伸ばして煤払ひ
狭山市　小俣　友里

忙中のこころ痩せゆく十二月
札幌市　岡崎　実

井上　康明　選

老いといふ果てしなき海冬落暉
豊田市　松本　文

△評▽うすうす感じてはいたものの、老いの果てしなさにがくぜんとしたのだ。冬の落日を見ながら、深い海の闇を思っている。

まだものの影はゆるまず初明り
川越市　峰尾　雅彦

△評▽やがてすこしずつ闇がほどけ、夜明けの光に、元日の天地が浮かび上がるだろう。

花の名を知らず冬陽のスベリ台
久留米市　持地　恒美

猪頸なる物理の教師着ぶくるる
尼崎市　森下久美子

石一つ拾ひて投げて去年今年
直方市　岩野　伸子

鏡餅プラスティックの軽さかな
前橋市　西村　晃

町工場焚火の猛る一斗缶
加古川市　伏見　昌子

俳諧の雅となりぬ松の内
東久留米市　夏目あたる

綿虫の呼気吸気吾が呼気吸気
小平市　中澤　清

裸木に不屈の瘤のありにけり
久喜市　利根川輝紀

片山由美子　選

電飾を外され裸木となりぬ
志木市　谷村　康志

△評▽葉を落とした木々に電飾が施されていたのではあるが、それを外されたことで、ようやく植物としての姿に戻れたのだ。

葉牡丹に陽の膨らみのありにけり
狭山市　小俣　敦美

△評▽葉ボタンのまるさを、日差しをたくわえてふくらんでいると見た。冬の太陽のありがたさ。

名を知らぬ切り花を買ふ十二月
神戸市　大田　雅一

寒柝や締めの一打は月へ打つ
東京　徳原　伸吉

日のひかり月の光の白障子
武蔵野市　渡辺　一甫

長き過去短き未来花八手
平塚市　日下　光代

すぐにまた会社の話題おでん酒
下妻市　神郡　貢

枯菊のあとかたもなく焚かれけり
北九州市　宮上　博文

花八手日射し届かぬ楽屋口
神戸市　常澤　俶子

冬座敷チンと鉄瓶鳴りにけり
葛城市　渡辺しん子

小川　軽舟　選

まなうらは暖かき色日向ぼこ
袖ケ浦市　浜野まさる

△評▽太陽の光に目をつぶるとまぶたの血が透けて見えるように明るい。暖かき色とは生きている証しの色なのだ。

帰り花耳を澄ませばささやけり
富士宮市　渡邉　春生

△評▽冬日につつましく咲いた季節外れの桜。風に揺れる風情はささやくかのよう。

原作と違ふ結末冬の月
臼杵市　村上　玲子

冬菊を供へて墓前去りがたし
伊勢市　藤井　信弘

綿虫と泛んでみたき日暮かな
大阪　芹澤　由美

冬枯や頭の中が散らかって
北名古屋市　月城　龍二

山眠る海の記憶の夢見つつ
香川　川本　一葉

長き橋わたる正面山眠る
直方市　岩野　伸子

けつまずき道化芝居や冬の月
中国　右　陣平

白杖の先に落葉のやはらかき
浦安市　上村実川喜

うたは奏でる　言葉の音

染野太朗

・うつくしい海辺をもって生まれればうたげのごとく天涯孤独　井上法子

「うつくしい海辺」の解釈が難しいが、おそらくその美しさは他の人がもたない唯一無二のものなのだろうということは想像できる。だからこその孤独なのだと思う。いや、あるいは誰もが生まれながらにもつ人としての尊厳や命そのものを指すのかもしれない。いずれにせよ「うたげ（宴）のごとく」という比喩にはどこか祝福のニュアンスも感じる。

その上で今回改めて注目したいのは一首が表す音について。この歌は全体に響く濁音や「ごとく」と「孤独」の音の重なり、ウの音による頭韻などが印象的だが、それらを意識するとき私たちは一首に配された言葉の意味をほんの一瞬忘れることになる。すると結果として言葉は音そのものになる。それを味わうことも歌を読むたのしみのひとつだろう。緻密に解釈したり想像を大きく広げたりするばかりが歌の読みではないはずだ。

・くちづけのたびに朽ちゆく遠い木をもついつからか死よりも遠く　藪内亮輔

まず「くち（づけ）」「朽ち」の重なりや第4句「もつ／いつからか」の句割れによって強調された「もつ」「いつ」の2音に気づく。するとその他の2音の言葉や、タ行音やクの音も目立ち始める。

言葉が5577のリズムを得るからこそ、より強調されるのが音や響きだと思う。ふだんの生活ではむしろ意識されないのが言葉の音なのかもしれない。

・紫陽花をまだのみこんだことなくてみなづきのみな幼いのみど　井上法子

（そめの・たろう＝歌人）